

選者 川口孤舟

投句・選句

今井紀久男 柿崎忠彦 川口孤舟 久米五郎太 熊谷くにお 後藤とみ子 小早健介

在間千恵 佐藤ただしげ 高橋康敏 田島正己 土谷堂哉 豊田ゆたか 中川雅夫

西澤國護 長谷見びん 福島正明 古田昇 古川百合子 星田啓子 宮内規雄

山崎亜也 山田けい子 山内天牛 渡邊盛雄

選句のみ

伊賀山そらお、梅崎くすを 重枝孝岳 庄司龍平 高橋清子 橋口隆 早川允章

山本三恵

【互選句】 ○は選者の「天」

◎は孤舟選者の選

十五点 かき氷崩し本音を漏らしけり

孤舟

(紀・くす・忠・く・五・と・千・〇孝・堂・

國・允・百・昇・規・盛)

九点

音立てて水飲む馬や夏木立

康敏

(そ・く・五・と・た・清・己・雅・啓)

つかの間の浄土あらわる夏夕焼

百合子

(紀・そ・〇と・〇龍・清・雅・び・規・け)

八点

噴水のあと一尺を究めかね

堂哉

(くす・健・五・〇千・百・啓・亜・〇三)

負けてなほ六甲おろし 月涼し

盛雄

(く・た・龍・康・ゆ・國・允・天)

七点

◎古里に旅人として墓参り

五郎太

(紀・健・康・百・〇啓・亜・盛)

◎古里に旅人として墓参り

國護

(忠・孤・孝・康・堂・け・天)

六点

◎老鶯に背中押されて坂のぼる

百合子

(紀・孤・ゆ・清・雅・正)

◎老鶯に背中押されて坂のぼる

昇

(そ・千・龍・堂・正・天)

五点

◎炎帝の赤き舌見た気の日

孤舟

(五・康・堂・隆・三)

◎染みの浮く師の蔵書印土用干し

啓子

(孤・千・清・己・三)

◎カラフルな締め込み揃ふ夏土俵

全

(孤・く・健・規・盛)

◎カラフルな締め込み揃ふ夏土俵

盛雄

(紀・孤・龍・己・允)

四点

◎舞台裏衣裳はただけて扇風機

紀久男

(孤・健・た・け)

◎舞台裏衣裳はただけて扇風機

孤舟

(忠・國・百・昇)

◎舞台裏衣裳はただけて扇風機

全

(〇くす・五・〇健・亜)

◎舞台裏衣裳はただけて扇風機

五郎太

(紀・忠・と・〇允)

◎舞台裏衣裳はただけて扇風機

とみ子

(紀・龍・正・け)

◎舞台裏衣裳はただけて扇風機

全

(紀・堂・ゆ・啓)

◎舞台裏衣裳はただけて扇風機

千恵

(紀・健・堂・昇)

◎舞台裏衣裳はただけて扇風機

正己

(く・孝・亜・け)

◎舞台裏衣裳はただけて扇風機

堂哉

(孤・清・隆・規)

◎遠泳の水練学校雲の峰

線香花火手に持つ幼児頬寄せて
大屋根を青田の囲む米どころ
潮騒や猫と微睡むハンモック
朝顔や施設のお迎え見送って
◎遠雷に囃子太鼓の稽古の音
國護 びん 昇 正明 亜也
(と・孝・康・天)
(紀・そ・ゆ・け)
(清・雅・び・○盛)
(紀・國・隆・び)
(孤・千・た・雅)

三点 ◎リハビリのおやつ嬉しやとところ天
張り込んで土用鰻の夕餉かな
「まずビール」誰が始めた合言葉
山頂や佐渡をはるかに額の花
芭蕉紙のうちわ風のやわらかなり
朝市のごつき容のトマト選る
本命は宵山とかや二人連れ
紀久男 忠彦 千恵 びん 亜也
(孤・○己・隆)
(隆・允・○昇)
(紀・國・昇)
(た・己・び)
(紀・雅・啓)
(千・百・啓)
(くす・孝・三)

二点 鼠小僧次郎吉

アスリートはだし殺人(たて)の見事な菊之助
まくなぎをまたも払ひし墓地の道
糟糠の妻夏山を二百回
須磨の浦遠泳知らぬ若者ら
うどん食へ中休みする半夏生
蝉聞けり裏山の歴史思いつつ
縁側で線香花火や夕涼み
花火待つ人のいきれの暗がり
◎屋形船ばかりの墨田川開き
甲羅灼け亀は忘我の境に入る
夏空が丸ごとラップす摩天楼
眼に汗の沁みるや痛し年金日
猛暑日や母は微睡む昼餉あと
亡き妻のふつくら笑顔鳳仙花
落とし文解かず眺めて地に戻す
忘ることなき八月の日々子の未来
紀久男 五郎太 健介 全 全 全 啓子 びん 全 全 国護 雅夫 ただしげ 全 全 規雄 けい子 盛雄
(忠・天)
(び・三)
(紀・盛)
(く・天)
(規・亜)
(紀・ゆ)
(た・ゆ)
(康・百)
(孤・龍)
(紀・啓)
(○紀・允)
(忠・隆)
(紀・そ)
(己・昇)
(孝・規)
(○そ・正)

一点 オンザロックからから鳴つてパリー祭
爺は言ふ棚田守ると虫送り
雷鳴つて雨も切り裂くホームラン
梅雨晴れや新札巡る狂騒曲
カクテルにミントの葉添へ涼しかり
長談義一步譲りて梅雨あがる
薫風や池に落ちたる空の色
桐の花若い人歩む靴の音
老い慰む鶯は友庭に立つ
くにお 千恵 全 全 康敏 堂哉 ゆたか 全 雅夫
(正)
(と)
(紀)
(○正)
(國)
(くす)
(くす)
(紀)
(三)

炎暑こそ現世の福と池の蓮
端座してふと座を崩す夏の雲
亡き妻の愛称アツチャン茄子の花
ゆらゆらと団扇手に舞ふ風情かな
信州の杏出雲に送りけり

びん
全
規雄
けい子
天牛
(蓮)
(五)
(盛)
(紀)
(び)

~~~~~

## 【句 評・短評】

十五点句 かき氷崩し本音を漏らしけり

孤舟

くにおさん・・・どんな本音を漏らしたんでしょうか。色々勝手に想像しています。  
五郎太さん・・・若い男女、いや母親と娘か、想像をかきたたせます。  
千恵さん・・・かき氷食べながらだったら心の内を吐露できるかもしれない。。。  
孝岳さん・・・かき氷を崩す行為によって、やっとな決心がつき本音を話すことが出来たのでしょう。良かったです。

堂哉さん・・・映画のワンシーンが浮かんできました。

百合子さん・・・氷をさくさくするうちに鬱屈も溶けだして

盛雄さん・・・相談ごとでしょうか。雰囲気は良く出ています。

九点句

音立てて水飲む馬や夏木立

康敏

五郎太さん・・・夏の盛り、馬もたいへんです。夏木立で涼しくなりました。

とみ子さん・・・すくすく育つ馬への優しい眼差しを、感じます。

ただしげさん・・・上五の表現が面白い。

啓子さん・・・ひと仕事終えたか、馬が勢いよくごくごくと水を飲む姿が上五で活写され、

夏木立が涼し気です。

つかの間の浄土あらわる夏夕焼 百合子

とみ子さん・・・特に海に広がる夕焼けは、神々しくまさにこのお句のようでした。

龍平さん・・・つかの間だからこそ値打ちが有るのでは？

八点句

噴水のあと一尺を究めかね

堂哉

五郎太さん・・・確かな観察のユーモラスな句です。

千恵さん・・・最後の着水地点付近で水のラインが崩れてしまつて残念だなくと。そこに視線を向けたのがユニークと思いました。

百合子さん・・・これには憶えがあるある。ほんとうに加減が難しい。

亜也さん・・・上がった水はどこかで落ちる。眺めていて感じるそのもどかしさ、よく言い表してくれました。

三恵さん・・・噴水を見ているとその規則性とリズム感から、釘付けになることがあります。

「もう少しっ」とつられて顔をあげてしまつたり、「スカっ」としたり。それに人口装置として水辺空間を美的にしてくれます。共感します。

負けてなほ「六甲おろし」月涼し 盛雄

ただしげさん・トラキチの気持ちがよく出ている。

龍平さん・・・点取れんのヤカラ 勝つわけナイヤロ お前！ソリヤソーヨ！

監督「O」は 涼しくはオマヘン!!

康敏さん・・・まだまだアレのチャンスありまつせ。季語がいいです。

ゆたかさん・・・甲子園の情景が懐かしいです。

天牛さん・・・私は一緒の宿舎に住んでいたので阪急ファンでしたが、関西ではめつたに巨人なんて言葉は使えません。

## 七点句

羅の師はやや痩せて舞の会

五郎太

康敏さん・・・お歳のせいか羅のせいか少し痩せてみえる舞のお師匠さん、お体が心配。

百合子さん・・・羅に透けてみえる華奢な姿。

啓子さん・・・羅でいつもより細く見える師は、もしかしてお歳か、夏痩せか・・・一寸心配。

亜也さん・・・薄物なればこそ気付く。背筋のしゃんとした姿が目につかぶ。「やや」がそこ

はかとなない気遣いを感じさせて絶妙。

盛雄さん・・・やや痩せに色気が滲む。夏の句の佳作。

古里に旅人として墓参り

國護

孤舟選者・・・既に身寄りも実家もない。墓だけが残されて自分は過客の思い。

孝岳さん・・・我がことのように感慨深いです。山口県に先祖代々の墓は 在りますが、近年

は実家もなくなり墓参の旅行となりました。

康敏さん・・・ご先祖様の墓参り、久しぶりの故郷は大きく変貌し旅人の心地。

堂哉さん・・・古里はますます遠くなりますね。墓参りも消え失せるのかしら？

天牛さん・・・私は旅人としても故郷で墓参り出来なくなり、お墓に東京に来てもらいました。

## 六点句

青春のパスポート繰る走馬灯

昇

千恵さん・・・ページのスタンプを見ればその時のことが想い出されますね。私もパスポート

ト処分してません。

龍平さん・・・私も20歳台末に中南米を一年半歩き回り何度も旅券が補刷された。今では

有り難き青春の移動記録。

堂哉さん・・・アルバムと共に古いパスポートは自分だけが楽しめる証ですね。季語も利いているかな。

天牛さん・・・最初に昭和34年に受け取ったパスポートは革表紙で外務大臣藤山愛一郎氏の

直筆のサインでした。辞令も社長室で市川さんから直接渡されました。

老鷲に背中押されて坂のぼる

百合子

孤舟選者・・・老いた身を鷲の元気な囀りに励まされる。

ゆたかさん・・・老鷲に背中押されての表現が奇抜です

## 五点句

カラフルな締め込み揃ふ夏土俵

盛雄

孤舟選者・・・最近の締め込みは派手なものが多い。

背泳ぎや空のだんだん深くなり

孤舟

五郎太さん・深くなる、という捉え方に感心しました。

康敏さん・石田郷子の代表作〈背泳ぎの空のだんだんおそろしく〉の本歌取りでしょうか。

堂哉さん・(昔、背泳ぎをしていた時の感覚を思い出しました)

隆さん・背泳ぎは空を楽しむ泳ぎでもある。

染みの浮く師の蔵書印土用干し

啓子

孤舟選者・蔵書印のあるとても貴重な一書。

炎帝の赤き舌見た気のする日

啓子

孤舟さん・炎帝が舌まで真つ赤にして怒っている。

## 四点句

菊之助の揚巻

舞台裏衣裳はだけて扇風機

紀久男

孤舟選者・なかなかこんな場面は見られない。

ただしげさん・舞台を降りた、役者の素の姿がでていて楽しい。

亡き友の席も忘れず大花火

孤舟

百合子さん・大花火には華やかさと儂さが・

河童忌や実に迷ひて虚に遊び

孤舟

五郎太さん・35歳で逝った龍之介は千以上の句を残した由。「夏山や山も空なる夕明り」

健介さん・人間社会を痛烈に風刺した芥川の「河童」、虚実の世界を徘徊するのは楽しい

です。

亜也さん・ちなみに芥川の忌日は谷崎の誕生日の由。

唐揚げの稚鮎三尾と紀伊の酒

五郎太

とみ子さん・食物の句のなかで、一番美味しそうです。

允章さん・吞兵衛の至福の時、唐揚げの稚鮎が酒の旨さを引き立てる。

マラケシユの月の広場に蛇遣ひ

とみ子

龍平さん・〈赤の街〉マラケシユ 〈白い家〉カサブランカ。これ迄紛争や観光で 幾多の

民族がモロッコに往来した事か？ でも古来の文化はしっかり生き延びてい

る不思議な夢の国。

片付けも散らかすも我かたつむり とみ子

ゆたかさん・老人の独り暮らしの情景ですね。納得できます。

啓子さん・一人で住まいするとまさにこの通り。季語にかたつむりを置かれ、自嘲気味に

気持ちを書いて妙と感じました。

一撃は空を切りたり御器かぶり

千恵

堂哉さん・最近殆ど見掛けませんが、ひと頃は良く追い回したものです。

紀久男・ハ音が五つも入っているリズム感！

合歓の花軽い軒で吾子も寝る

正己

亜也さん・夏の午後の幸せな情景。合歓の「ネム」の音がひそかに呼応。

遠泳の水練学校雲の峰

堂哉

孤舟さん・小学校時代、海での遠泳は授業の一環だった。

隆さん・遠泳に雲の峰は、一幅の絵画。

※康敏さん・遠泳、水練、雲の峰、これらは夏の季語です。

線香花火手に持つ幼児頬寄せて

國護

とみ子さん・子供の中の懐かしい思い出が、線香花火の匂いとともによみがえります。天牛さん・私が付き合っていた幼児はすっかり大きくなりましたが、なつかしい情景です。康敏さん・自由律の大橋裸木の（線香花火持つ子が母に頬寄せてゐる）を彷彿とさせます。

大屋根を青田の囲む米どころ

びん

ゆたかさん・少し高い丘から望む光景でしょうか。景色が臉に浮かびます。

潮騒や猫と微睡むハンモック

昇

盛雄さん・夏の海浜でこう在りたいものです。中七が楽しい佳句。ダントツの「天」です。

朝顔や施設のお迎え見送って

正明

隆さん・「朝顔やデイサービスの迎えにも」でも。

紀久男・私は見送られる側で、朝夕のリハビリ施設で元気が出ます。

遠雷に囃子太鼓の稽古の音

亜也

孤舟選者・雷鳴と太鼓の音のハーモニー。

ただしげさん・遠くの雷も気に留めず、夏祭りのお囃子の稽古に余念がなく、楽しそう。

### 三点句

リハビリのおやつ嬉しやところ天

紀久男

孤舟選者・おやつ目当てに厳しいリハビリに耐えている。

正己さん・おやつどころ天にギャップを感じるが、リハビリ中ならさもありなん、とそ

の心持が感じられる。

隆さん・リハビリと心太の落差に嬉しさ倍増。

張り込んで土用鰻の夕餉かな

紀久男

隆さん・「大枚をはたいて土用鰻かな」でも。

昇さん・今年の猛暑は異常です。上5よりスタミナ補給の意気込みが伝わって来ま

す。最高に美味。奮発した甲斐がありましたね。

山頂や佐渡をはるかに額の花

くにお

ただしげさん・日本海を望む雄大な景色が目には浮かぶ。

芭蕉紙のうちわ風のやわらかなり

千恵

啓子さん・芭蕉紙の団扇・芭蕉の繊維で作った紙があるのででしょうか・しなりつつ風を送ってくれる少し大きめな団扇。暑くもゆったりとした夏の午後が見えるようです。

朝市のごつき容のトマト選る

びん

千恵さん・スーパーの棚には並ばないようなイビツだけと美味しそうなトマトを見つけましたね！

百合子さん・朝採りのトマト、さらにごつい方が野性味があつていいかな。

啓子さん・朝市でのまだ露が残るような採りたてのトマト。ごつい顔をしたトマトは販売している生産者の手ずからの産品でしょう。選るのも楽しい。いかにも朝市らしい景です。

鼠小僧次郎吉

アスリートはだし殺人（たて）の見事な菊之助 紀久男

天牛さん・・・「はだし」できまりですね。しばらく使っていませんでした。

糟糠の妻夏山を二百回

健介

盛雄さん・・・ご自慢の妻の健脚。なかなかのものです。

須磨の浦遠泳知らぬ若者ら

健介

天牛さん・・・プールができてから海で泳ぐことが殆どなくなりました。

うどん食へ中休みする半夏生

ただしげ

亜也さん・・・讃岐では半夏生に食べる習わしとか。どうせ毎日食べてる気もしますが…

蝉聞けり裏山の歴史思いつつ

雅夫

ゆたかさん・・・裏山にはどんな歴史があるのでしようか。

縁側で線香花火や夕涼み

國護

ただしげさん・・・昔を思い出させる夏らしい句だが、残念ながら季重なり・・・線香花火、

夕涼み。

ゆたかさん・・・老いの身の情景ですね。納得できます。

※康敏さん・・・季重なりですが、子規に〈夕涼み線香花火の匂ひかな〉があります。

花火待つ人のいきれの暗がりと

國護

康敏さん・・・足立の花火大会を待つ大群衆も同様な状況だったが……。

百合子さん・・・情景がありありと目に浮かびました

屋形船ばかりの墨田川開き

國護

孤舟選者・・・両国の川開きは花火と屋形船が主役。

甲羅灼け亀は忘我の境に入る

びん

啓子さん・・・炎天に甲羅干しの亀。全く動かぬその亀は忘我の境地か、はたまたこの異常な

暑さに亀も熱中症にかかるかしら、と思ったら失礼ながら可笑しくてクスリと

笑ってしまいました。

夏空が丸ごとラップす摩天楼

啓子

紀久男・・・スケール大きなニューヨークや最近の渋谷の景色。

眼に汗の沁みるや痛し年金日

啓子

隆さん・・・年金の有難さより、痛いと感じてしまう経済環境

爺は言ふ棚田守ると虫送り

千恵

とみ子さん・・・小豆島の虫送りの美しい写真を見ました。農事は大変でしょうが、この

棚田の風景は、のこして頂きたいものです。

雷鳴つて雨も切り裂くホームラン

千恵

紀久男・・・大谷の活躍ぶりに感服する。

梅雨晴れや新札巡る狂騒曲

ただしげ

正明さん・・・世の中はキャッシュレスに向かっているのにこの新札とは。何かテレコテレ

コという感じです。

炎暑こそ現世の福と池の蓮

びん

亜也さん・・・端然と咲く姿が啓示する機微。

※康敏さん・・・炎暑と蓮の季重なりです。

端座してふと座を崩す夏の雲

びん

五郎太さん・・・季語が効いています。

ゆらゆらと団扇手に舞ふ風情かな

けい子

紀久男・・・大阪・大阪宗右衛門町「大和屋」で観る地唄舞。



【次回青葉会】 ※ご注意下さい!! 八月及び九月の句会のご案内です。

☆八月二十二日(木)

誌上句会 (昨年同様、メール使用者はWEB句会、郵送の方は 誌上句会

○ご投句締切を少し早めます・選句表郵送の方も八月二十二日(木)句会の日にお手許に届くように手配します。

ご投句締切日 八月十六日(金) 厳守ください。

ご投句については・・・ご投句数に幅を持たせませす!!

当季雑詠 メール・FAX・郵便手段を問わず3句から5句まで受け付けさせていただきます。

※選句締切についても早めにさせていただき、八月三十一日(土)とさせていただきます。会報も早めに発行できるように努力致します。

☆九月二十六日(木)

十二時～ 三軒茶屋 新「しゃれなあと」(昭和信金三軒茶屋支店ビル)

○ご出句・ご投句の締切日をだいぶ早めます(編集者の都合です。申し訳ありません!)

ご投句締切日 九月十二日(金) 厳守ください。

※この締切日が可成り早いので、恐縮ながら是非ご準備早めに、よろしくお願い致します。

ご出句、ご投句の数は従前どおり。当季雑詠 句会参加者五句・ご投句の方は二句を目処に。

句会の後の段取りについては、メール使用の皆さまへの選句表配信が恐縮ながら遅くなり、二十八日(金)となる予定です。

※九月の選句締切については通常通りの十月五日(土)あたりを予定致します。

皆さまには、慣れた日程から大きく変化がありますため、些か面食らうところがあるかもしれませんが、何卒よろしく、ご協力賜りましたら有難く存じます。どうぞよろしくお願い致します。



## 青葉会報

一、 七月句会については、当初は集合しての句会を予定しておりましたが、猛暑続きで連日、熱中症警戒アラートが発表されたため、ご出席をお考えだった方々のご意見もいただき、孤舟選者、いつも司会など取り纏めをお願いしている五郎太さんのお二方にご相談の結果、急遽集まらずに開催する「誌上句会・WEB句会」に変更させていただきました。みなさまには

ゆつくりご自宅での選句をお願いし、結果はご覧の通り、孤舟選者の夏らしい「かき氷・・・」がダントツの十五点を獲得、次点は九点の二句で、康敏さんの「音立てて・・・」と、百合子さんの「つかの間の・・・」でした。続く八点、七点とそれぞれの視点に作者のご様子が感じられるような句、共感を得られるような句が続いており、青葉会の誌上句会は賑やかです。

厳しい暑さに拘わらず、今回七月のご投句・選句二十五名、選句のみの方八名となり、ご出句数は八十一句、例月とほぼ変わりないご参加の状況でした。まだまだ続きそうな猛暑の中、八月もご無理をなさらずお家の中でゆつたりと俳句に遊んでいただければ・・・と願っております。

## 二、孤舟選者近詠

船虫の寄つて集つて謀議中

漁火の揺れ一湾の夜光虫

空耳か月下美人の眩きか

恋蛩此の世彼の世のあはひ飛ぶ

帰省してすでに過客となりおほす

## 四、「関係者近詠」はお休みいたします。

令和六年八月九日

了